

## プログラム・ノート

平野貴俊

### ストラヴィンスキー：クラリネット独奏のための3つの小品 より 第1番

第1次世界大戦勃発後スイスで過ごしていたイーゴリ・ストラヴィンスキー(1882～1971)は、『兵士の物語』(1918)の上演にあたって、パトロンでアマチュアのクラリネット奏者、ヴェルナー・ラインハルトから財政的な支援を受けた。そのことに感謝して1918年に作曲された本作は、無伴奏独奏クラリネットのための貴重なレパートリーのひとつとなっている。第1番では、内省的で朴訥としたモノローグが低音域で奏される。

### ストラヴィンスキー：『シェイクスピアの3つの歌』

アメリカで暮らしていた71歳のストラヴィンスキーが1953年に作曲した独唱、フルート、クラリネット、ヴィオラのための作品。彼が音列を使用した初期の作品のひとつであり、現在も続くロサンゼルス現代音楽コンサートシリーズ、イヴニングズ・オン・ザ・ルーフ(現名称はマンデー・イヴニング・コンサーツ)で初演された。第1曲「耳に響くは楽の音」(ソネット第8番)では、美妙な楽の音へ耳を傾けよという呼びかけが、声と楽器の二重奏を主とするシンプルなテクスチュアで彩られる。第2曲「父は五つ尋海の底」(『テンペスト』より)は、妖精エアリアルがナポリ王子ファーディナンドに、王子の父は死んでいると嘘を告げて彼をおびき寄せる場面。前曲の流麗さは厳粛さに取って代わり、最後に弔鐘が鳴り響く。第3曲「まだらなヒナギクと青いスマレと」(『恋の骨折り損』より)では、奇妙なスペイン人アーマードーの主導で、春の楽しさと愛の移ろいやすさが歌われる。謹厳な第2曲とは対照的に、かっこうの歌が陽気に、やや皮肉っぽく模倣される。

### ラヴェル：『マダガスカル島民の歌』

2作目のオペラ『子どもと魔法』(1920～25)を完成させたばかりのモーリス・ラヴェル(1875～1937)が、アメリカのパトロン、エリザベス・スプレイグ・クーリッジの委嘱を受け、1925年春から翌年にかけて作曲した作品。編成は独唱、フルート、チェロとピアノで、詞は18世紀フランスの詩人エヴァリスト・ド・パルニーによる同名の詩集(1787)から採られている。ラヴェルは、本作は『月に憑かれたピエロ』が書かれていなければ存在していなかったかもしれないと述べている。第1曲「ナアンドーヴ」は、少年(もしくは青年)が歌う官能的な恋の歌。暴力的な叫びで始まる第2曲「アウア！」

では、侵略する白人たちへの敵意があからさまに歌われる。**第3曲**「気持ちのよいことだ」では、夕暮れに休息する男が女たちに、物憂げに声をかける。

### ベルク：室内協奏曲 より 第2楽章「アダージョ」 (ヴァイオリン、クラリネット、ピアノ用編曲)

アルバン・ベルク(1885～1935)はオペラ『ヴォツェック』(1917～22)に続いて、師シェーンベルクの50歳の誕生日を記念してピアノ、ヴァイオリンと13の管楽器のための室内協奏曲(1923～25)を作曲した。シェーンベルク、ヴェーベルンとの「20年におよぶ友情のささやかな記念碑」(ベルク)である本作では、3人の名が音に置き換えられ、3という数が設計上の軸をなす。ドイツの哲学者・音楽学者アドルノは、本作品と『月に憑かれたピエロ』との親近性を指摘している。第2楽章「アダージョ」は全体が鏡像形(A1-B-A2-A2-B-A1)をなし、各部分の小節数は3の倍数、楽章全体の小節数は240である。本楽章には、1924年に亡くなったシェーンベルク夫人マティルデ(Mathilde)の名が現れるともいわれる。ベルク自身が最晩年に行った第2楽章のヴァイオリン、クラリネット、ピアノのための編曲(1935、編曲では6小節追加され246小節となっている)では、原曲では控え目に用いられていたピアノが和声をくっきりと響かせ、官能性と抒情性を際立たせる。

### シェーンベルク：『月に憑かれたピエロ』作品21

『グレの歌』(1900～01、01～03、10～11)完成直後、アルノルト・シェーンベルク(1874～1951)が女優・歌手アルベルティーネ・ツェーメの依頼を受け、1912年に作曲した作品。フルートとピッコロ、クラリネットとバス・クラリネット、ヴァイオリンとヴィオラ、チェロ、ピアノ、シュプレヒシュティンメ(語りと歌の中間に位置するパート)を担う女声の6名で演奏される。特徴的な声の扱い、不穏な世界観をもった詩の選択、声と器楽アンサンブルという編成は、後の音楽創作に莫大なインパクトを与えた。シェーンベルクは、ベルギーの詩人アルベール・ジローの同名のフランス語の詩集を、ドイツの作家オットー・エーリヒ・ハルトレーベンが自由に手を加えつつドイツ語に訳した版から21篇を選び、各部が7曲を含む全3部の作品となるよう並び替えた。月とピエロをテーマとする密やかで妖しげな**第1部**(「月に酔う」～「病める月」)、死や暴力を描いたグロテスクで不気味な**第2部**(「夜」～「十字架」)に続き、ピエロの郷愁と感傷を扱う**第3部**(「郷愁」～「おお、懐かしい香りよ」)には仄暗い抒情が漂う。